

<エッセイ>

異なる生と出会う場所としての「家」： 京都の町家街区を例として

前田昌弘

先日、町家の滅失が止まらないという京都市内の現状が報じられた。ここ8年間で年平均1.73%の減少率、その前の8年間の減少率が1.68%という数字から、町家の解体が加速していることがわかる¹。京都の街なかを歩いていても、コロナ禍が終わりインバウンドの訪日客でにぎわう風景が再び日常となってきたが、活況をよそに密かに次々と町家を取り壊されている。町家滅失の加速を具体的な数字とともに報じた上の記事の内容は、街に暮らしていて抱く感覚とも一致しており、特に驚きはなかった。しかし、町家解体の風景はいつまでたっても見慣れない。町家の解体現場の前を通りがかるたびに「ああ、またか…」と残念な気持ちになり、心が痛む。

リノベーションとは、リユース(再利用)とイノベーション(創造)をかけあわせたような言葉であり、単に建設当初の用途や設備の水準に戻すことを意味するリフォームと区別される。最近、町家を含め、古い建物のリノベーションがブームであるが、まだまだ世間一般に浸透しているとは言えない。諸々の社会制度(不動産価格の査定、建築行為の許可、住宅ローンの審査等)も新築をベースとして組み立てられており、古い建物を活かすことには様々なハードルが存在する。一方、リノベーションされた町家にも問題がないわけではなく、家に住むことが他者と交わる場所をもつことであったという本来の性格が失われていると感じる例も少なくない。たとえ町家の建物自体は残されたとしても、それは長期的にみれば都市の生活文化の衰退であろう。

町家は、都市に様々な人が集まって住む文化のなかで立ち現れ、育ってきた。都市の集住文化としての町家を、現代の人と環境の関係についての思想的潮流であるポストヒューマニズム(post humanism)を踏まえると、どのように記述できるだろうか。ポストヒューマニズムとは、立場によって様々な説明ができるが、ここでは、人間の意思や主体性を人間という存在のみに閉じて捉えるのではなく、人間以外の存在(モノ、

生物、自然、環境、さらには超越的な存在)との相互作用、反復するリズムのなかに見出そうとする発想である。たとえば、家を文字通り様々な動植物が棲む一つの生態系として捉えた著作(ダン 2021)やモノを含む他者との交互作用から家空間について論じた著作(コッチャ 2024)、人類学とアートが協働し空き家の記憶を紡いだ著作(服部・小野・横谷 2023)などがある。これらは、家という存在を、人間という主体、あるいは狭義の人間性(機能性・利便性)のみならず、人間と環境とのやりとり、そして、それに伴う美的判断や心性といった次元で捉えようとしている点でポストヒューマニズム的である。このような思想が台頭している背景には、人新世(Anthropocene)の時代とも呼ばれるように、現代の社会が、人類の営みの産物としての人工物によって地表が覆い尽くされ、もはやそのことを前提とすることなく人間の生や種としての存続を考え難いという認識が一般化していることとも関係している。

話が広がり過ぎたので、町家に話を戻す。現在、町家の滅失を食い止める方策には条例で解体の事前届け出を義務づけた規制や改修に対する補助金の支給等があり、それなりの効果を示している。ただ、規制や補助金だけでは明らかに限界がある。そこで、町家の魅力とリノベーションによる収益といったメリットを所有者にアピールし利活用を後押しするという方向があるだろう。しかし、ただ利活用を後押しするだけでは、それがうまくいったとしても結局のところ資産として消費され、町家本来の生活の場や文化としての性格が失われ、長期的な視野からみたととき、町家滅失の流れは変わらない。やはり、町家をきっかけとして、都市に集まって住むことから享受できる豊かさとは何かということについて、いまいちど立ち止まって考えることが必要なのではないだろうか。本稿では町家をめぐりいくつかの言説のなかに関心を持ちながら、町家の豊かさを記述する方法について考察する。町家を含む伝統的な住まいのなかには人と環境がやりとりすることによる共存の原理が見出されるであろう。

京都の町家街区では、通りの両側の家々が集まることで一つの共同体、いわゆる両側町が形成されている。平安京では一街区一辺 40 丈(約 120m)の正方形を基本としてグリッド状に街路が張り巡らされた。当初は街路と共同体の境界が一致していたが、それがやがて崩れていき、現在みられる両側町のかたちになったのは中世の戦乱期であったと言われる。応仁の乱によって都が荒廃し、町衆と呼ばれる当時勃興しつつあった商工業者たちが自己防衛のため通りの両側でまとまり、町の境界に

あたる辻に木戸と呼ばれるゲートを設置することで自己完結的な共同体を完成させた。建築史家の長谷川堯は町衆たちがつくった共同体(両側町)を、当時の公権力がつくった都市の骨格(街区)と対置しながら以下のように記述している。

彼ら(町衆)は京の街を灰燼に帰した「応仁の乱」の焼土の上に立って、そこに神殿都市ではなくて本来の<都市>を構想し自分たちの生活場を自律的に守ろうとした。それは「京都のなかにつくられた新しい自活的な自己防衛の団結」に他ならなかった。(中略)彼らは上から提示された方形のブロック形の街区を主体的に放棄し、それらを二つの対面するツラに解体し、それを彼らの都市の囲壁の重要な部分とし、さらに街路(オモテ)を体腔として内化し、オモテの両端つまり辻に彼ら自身の都市門を置いた。「町」はこのようにかつてのグリッド・プランを実にあざやかに背転(アウトサイドイン)したかたちで出現し、「町」と「町」の連鎖によって、碁盤の目の街区は、激しい戦乱の中で別の都市として鮮やかに再生していったのだ。(長谷川 1971)

長谷川が「本来の都市」と表現するように、焼土の上に再建された町家街区は、上からあてがわれたグリッド状の街路網が町衆たちによって再解釈され、自分たちの都合にあわせてデザインされ直されたものである。「すべての共同体は自らをデザインしている」とは、開発人類学者アルトゥーロ・エスコバルの言葉である。町家街区の両側町への再編はまさに戦乱期を生き抜いた人々の不安と防衛意識のかたちと相似形であり、エスコバルが言うところの「自治=自律的デザイン」の実践であった。

町家の空間は近世を通じて洗練されていく。これは世界中の民家や伝統的都市型住宅、いわゆるヴァナキュラー建築に共通する特徴であるが、京都の町家も、その場所で手に入りやすい材料を用い、土地の気候風土へと適応し、人間関係を調停することで、人々が集まって住まう文化を涵養してきた。京都の町家の場合、建物と庭がうなぎの寝床状の敷地に交互に配され、かつそれらが隣家とゆるやかに連担することで、都市の過密な環境のなかでも光と風を共有し、自然の恩恵を最大限に享受している。また、大戸、玄関、中戸といった町家の通り庭に沿って配置された複数の出入り口は仕事関係の客、正式に招かれた客、近所の人といった具合に相手との

関係性に応じて使い分けられ公私の領域を柔軟に調整することを可能にする。そして、かど掃きや水撒きといった自宅前の街路の手入れを行う日々の習慣は、私的領域の範囲を隣人にさりげなく示し、互いの関係性を確かめあう行為として重要な意味をもつ。町家街区には、しばしば暗黙のルール、不文律によって制御される人々の行為や空間が、細部にまで行き渡っており、それらは馴れ合いや甘えを嫌い、町ぐるみで自律の精神を醸成するという住民たちの集合意識の投影と言っても過言ではない。このように、町家街区の共同体もまた集合的意識のなかで自らをデザインしている。それは歴史的な変遷など、マクロな変化としても捉えられるが、人と人、人と環境の関係性の細やかなチューニング、ミクロな変化、あるいは変化とさえみなされないささやかな営みの集積にこそ見出される。

共同体という言葉からは、成員が固い絆で結ばれ相互扶助に充ちた集団といった、農村的な共同体を想像しやすいかもしれない。しかし、京都の町家街区の共同体はそういったイメージからはかけ離れたものである。建築学者の上田篤は、商家が軒を連ねる京都・西陣の町家街区のコミュニティを対象として、職住一致の集住社会における人間と空間の関係について考察している。上田は町家街区のコミュニティを「義理の共同体」、「呉越同舟的な近隣小集団」と呼び、①隣家に立ち入らない、②隣人と物の貸し借りをしない、③井戸端会議というものはない、といった生活上の暗黙のルールの存在を明らかにしている。それは、親密性を基礎とした共同体では欠かさないはずの行為が町家街区では皆無であることを意味する。「義理の共同体」とは、背景が異なる人々が居合わせる都市において必要最低限の関係を保とうとする人々の集合的意識を呼び表したものであり、それを上田は以下のように表現する。

地藏盆、氏神等の祭や他の行事をする義務が、個人的なつきあいまで及ぶ。しかし、このつきあいには単なる約束事(とりきめ)という性格が与えられ、個人が分担する責任を義理と礼儀が要求する範囲に制限している。(上田 1976)

ここで興味深いのは、町家街区では私的なつきあいでさえも町内の行事のなかで様式化、形式化され、一種の公的な交際となっている点である。親密的なコミュニケーションが徹底的に排されているのである。上田はまた、町家街区において人間どう

しの距離感を調節する人工物の役割にも着目しており、京詞(きょうことば)、うなぎの寝床状の敷地、格子窓といった要素が相互緩衝物となることで、人々が直接的なコミュニケーションを避けながら互いのことを窺い知ることができると述べている。

相互緩衝物の例として、先ほどの建物と空地の連担や複数の出入り口などがある。他にも、格子窓は、建物の内外の明暗差を利用して、昼間でも薄暗い建物のなかから明るい通りを歩き交う人々の様子を窺い知ることができる。これら相互緩衝物は、人々がこうありたいと願う、家の外の世界や他者との関係と相似形であったのではないだろうか。家を構成する物が人々の日常的な行為を支える役割を果たすことで、人々の都市への態度や心性を投影した存在となっている。このような、物と人が分かちがたく結びついた関係も、もちろん時代の変化とともに失われていく。しかし、時代ごとの流行や技術変化に左右されて移ろいやすい意匠や機能に比べ、人々の内面や集合的な意識、そして、その投影である物の意味は時代が変わってもそう簡単には変わらないし、変えられないのではないだろうか。人と物の意味の結びつきを享受し、移ろいやすい都市のなかに自分という存在を定位する。そういった住み方ができることこそ豊かな生き方に欠かせない条件と言えるのではないだろうか。

本稿では、ポストヒューマニズムの発想を手がかりとして、過去の言説のなかに、人間と非人間(物・空間)の混成的なネットワークの結節点としての町家の記述を探ってきた。利便性、快適性、親密性といった現代の住まい・コミュニティに一般的に求められる性質では捉えきれない空間の質が町家街区には潜在していることが確認された。その質をもたらしているのは、家における異質な生や他者との出会いであろう。「家」とは何かということについては、実務と学術の両面でこれまで議論が繰り返されてきたが、「家」とは「私」の換喩(メトニミー)、つまり置き換えであるという見方(柏木2013)がある。町家街区の場合、家とその集合は他者との関係を含めた「私たち」の換喩であることが、建築の細部や生活の所作から読み取ることができる。家というものがその内部に異質性や他者性を包含することを求めるのは、「私」や「私たち」が常に異質な生や他者との対話のなかで形成されていく存在だからではないだろうか。だとすると、家とその構成要素は単に人々に影響を与える物というよりは、意思や人格を構成する、行為主体性をもった存在とみなすべきであろう。

家をめぐる異質な生や他者とのように出会い、やりとりしているのか。それを知る

にはやはり、生活者の視点からの記述が手がかりになるであろう。町家の住み手が日々の生活を綴った著作やエッセイは既に数多くある。そのなかで物としての家との関係に焦点が当たっているものとして、例えば、京都生まれのマリンバ奏者が実家近くの町家を購入したことを機に、様々な古材や建設儀礼、職人たちと出会いながら取り組んだリノベーションの記録を自ら綴ったエッセイ(通崎 2011)、料理研究者として知られる女性が人生の大半を過ごした町家に残された大量の物、家財を、彼女の人生や京都の生活文化の紹介とともに生活財調査的な手法によって記述した著作(横川 2007)などがある。建築学などではこれまで、街並みを構成する要素としての町家、あるいは町家の空間における人々の暮らしといった記述のスタイルが一般的であったが、そういった従来のスタイルとは異なる形での記述の方法もあり得るはずである。町家に住んできた人たちの言葉やそれを記述してきた人々の営みのなかに、住むことの豊かさを描く手がかりを探していきたい。

¹ 町家とは一般的に職住一体型の都市型木造住宅を指す。行政(京都市)の定義では、建築基準法が制定された1950年以前に建てられた3階建て以下の戸建てや長屋建てなどの木造建築で、京格子や虫籠(むしこ)窓、通り庭といった伝統的な構造や形態、意匠を有するものとされている。町家の残存数は京都市が定期的に調査しており、京都市内の町家の数は47,735棟(2008~09年度)、40,146棟(2016年度)、34,580棟(2024年度)と遷移してきており、最新の結果が京都新聞2025年2月5日朝刊の一面でも報じられた。

<参考文献>

- 上田篤『京町家 コミュニティ研究』、鹿島出版会、1976
エスコバル、アルトゥーロ著、水野大二郎・水内智英・森田敦郎・神崎隼人監訳『多元世界に向けたデザイン』、ビー・エヌ・エヌ新社、2024
柏木博『わたしの家―痕跡としての住まい』 亜紀書房、2013
コッチャ、エマヌエーレ著、松葉類訳『家の哲学 一家空間と幸福』、勁草書房、2024
淡交社編集局『京の町家案内―暮らしと意匠の美』、淡交社、2009
ダン、ロブ著、今西康子訳『家は生態系 ―あなたは 20 万種の生き物と暮らしている』、白揚社、2021
通崎睦美『天使突抜 367』、淡交社、2011
長谷川堯『神殿か獄舎か』、鹿島出版会、2007(相模書房版、1972)
服部志帆・小野環・横谷奈歩編『アートと人類学の共創―空き家・もの・こと・記憶』、水声社、2023
横川公子編『大村しげ 京都町家ぐらし』、河出書房新社、2007